

Title	蒙古學報 第一號(蒙古研究所研究部發行)
Sub Title	
Author	竹田, 龍兒(Takeda, Ryuji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1941
Jtitle	史学 Vol.19, No.4 (1941. 3) ,p.142(726)- 145(729)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19410300-0143">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19410300-0143</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

氏のそれを生むに至つた。この運動と關聯してショットウェル教授は前記の文明記録叢書を計劃した。しかるに米國が世界大戦に參戰するに至つた結果氏も軍國の事務に携はることとなつたので、その七巻を刊行しただけで中斷してゐたが、この刊行の事業はその後コロンビヤ大學で繼承せられ、目下 Austin P. Evans 教授の下に續刊（約四十巻）せられつゝある。

舊著はそれ等の資料及び批判的著作に指針を與へんとするにつたが、その間に於ける米國史學の發達は本書の目的を一變せしめ、新著に於ては書目解題的案内は一層完備せるその後の諸著に譲り、主として修史の歴史を説くことになつた。しかし修史は『變化する社會の單なる反映に過ぎない』とする氏の史學史はその名を超えるものであるが、ハーバード大學の W. S. Ferguson 教授が評してゐる如く (A. H. R. Vol. XLV. pp. 849—851) その目的は十分に達成せられてゐる。前には不戰條約の起草者であり今はコロンビヤ大學の國際關係史を擔當する教授が、この好著を擴大して中世及び近世の部分に對しても續刊し得るに至つたことは、我等の大いに欣びとすることである。

(間崎万里)

### ヘロドトス著 歷史 (ヒストリアイ) 上巻

なほ譯者の勞を謝すと共に其の健康を祈り、下巻の出版を鶴首待望する次第である。生活社刊、定價金四圓八拾錢也 (昭十五、十、二十二、近山金次)

アリストテレスの研究家、青木巖氏がヘロドトスの歴史の翻譯に取かかられたと聞いたのは此の春のことであつたと思ふが、僅か數ヶ月にして早くも前半を上梓された其の速度に一驚させられたものは筆者一人ではあるまい。氏のギリシャ語に關する蘊蓄

は既に人の知る所、譯文も極めて平易である。泰西史學の最古の古典たるヘロドトスの書、當然有つべき其の譯書を終に此處に得て我等古典を愛讀する者は言葉に言ひ盡せぬ大きな喜びを覺える次第である。

歴史の父と言はれるヘロドトスの書はベルンハイムの所謂物語風の歴史であり、ニーチェの言葉を藉りて言へば記念碑的な歴史であるかもしがれぬ、其處には單にギリシャ民族の記憶があるのみで意志がないかもしがれぬ、然し最古の東西爭鬭史を描く其の書は同時にギリシャ民族そのものが眞のギリシャを發見した時代の貴重な記録をとどまる書物として、其の史的價値は無限なものである。我々に當時の興味ある幾多の材料を提供してくれる此の書の一讀は凡ゆる史學研究家にとつて必要缺くべからざるものであることは言を俟たぬ。今、此處に忠實平易な其の邦譯を得て誠に欣快に堪えぬものがある。

最後に強ひて難を言ふとすれば誤植が少くないことである。殊に前半に於てその多くが認められる様である。本書の如き出版に於て其れは特に遺憾である。

### 蒙古學報 第一號 (蒙古研究部發行)

多年蒙古民族との親善提携に力を致すと共に、「善隣協會月報」

(昨年、蒙古と改題) 及び「蒙古學」を刊行してわが蒙古學界の發展に寄與するところ大であつた財團法人善隣協會が昨年調査部と研究部より成る蒙古研究所を創設した事は學界の等しく注目するところであつた。本年七月に至り、同研究所は果して吾人の期待に背かず堂々たる機關雜誌「蒙古學報」を創刊せられた事は斯界のために慶賀に堪へぬ次第である。

左に遅れ馳せ乍ら創刊號の内容を紹介して華々しいその首途を祝福致し度いと思ふ。

先づ卷頭を飾るに元の法制史研究家として令名ある有高巖博士の「元代の訴訟裁判制度」を以てしてゐる。博士の意圖せられるところは、元代の法院組織や訴訟手續等を概観することによつて元朝の立法精神の特殊性を闡明せんとするにあり、これによつて元朝の法が多分に自由主義的實際主義の方針の下に編定されたものなる事が認められるのである。然し乍ら約會制に關しては博士の所説には異論が見出される。即ち愛宕松男學士が「元代色目人に關する一考察」(蒙古學第一冊) (II) 本俗法 (五) 詞訟の條に説くところがそれである。恐らく至元四年以後に於ても哈的所が依然行政權と裁判權とを行使してゐた如くであり、畏吾兒・哈迷里に就いても同様頭目による本俗法に基く自治的解決が許されてゐたと考ふべきではあるまい。

榎一雄氏の「玉韶の熙河經略に就いて」は八〇頁にわたる雄篇である。宋夏の關係に就いてはさきに中島敏氏によつて「西羌族をめぐる宋夏の抗争」(歴史學研究第一卷第六號) なる概括的研究が發表せられてゐるが、榎氏は神宗即位後に於ける對西夏政策の

重要な一面に對して更に犀利なるメスを加へられたものである。由來宋から西夏を攻めんとするには大略二つの方向があり、一は東端から無定河に沿うて北上しオルドス南方の分水嶺たる横山部の夏人を招誘して更に西に向ふ方策と他は黃河上流方面の吐蕃を懷柔し以て西夏を牽制せんとする方略とである。前者は殆ど詔の平戎策も後者に屬する。王韶は西夏を討たんとすれば黃河湟水一帶の地を收復すべしと力説し、晦斬囉歿後、青唐族の統一なきに乗じて之を招撫し以て西夏の南侵に備へんとしたその方策は幸に王安石の支持するところとなり彼自らこれが經營に當つたのである。その結果はたゞへ成功とは言ひ難いとするも、聳々たる世の非難を押切つて敢然事に當つた王韶の意氣と苦心經營の迹は正當に評價せらるべきであつて、王船山が宋論に於て「誠に奇なり唯だ其れ奇なり、是を以て進みて尺寸の功無く而して退いて邱山の禍あり」と評したのは餘りに酷に失するものと言はざるを得ない。この點我等は史料を博搜して健實妥當な論斷を下して居られる氏の態度に敬意を表するものである。

村上正二氏の「元朝に於ける投下の意義」は從來安倍健夫・小林高四郎等の諸氏によつて種々論議され來つた蒙古封建制度史上の基本的難問題を別個の立場から巧みに處理解消されたもので、わが國蒙古史學界最近の一大收穫として特記すべき勞作である。元代の史料に散見せる投下なる語が遼史の頭下・投下・投項・頭項と略同様の意義に使用されてゐる事は既に田村實造・安倍健夫兩氏の論證を経て明かなところであるが、蒙古帝國に於ける投下

の内容は遼史の知識のみではなほ充分に説明し得ない點が残されてゐた。即ち投下・本投下・愛馬三者の關係如何といふ問題がそれである。遼及び蒙古帝國に於て未熟なる遊牧經濟の基礎を強固ならしむる目的の下に盛んに外征を行つて生産技術者を抄掠植民し、これを君長以下の部曲とせる所謂投下領の成立を見るのである。然るに蒙古民族が後に南方農耕地帶を支配するに及びそれらの地にも投下權の設定を認めけれども此等新投下領は支那農耕社會の官僚的封建機構の制約を受けて、その本質上に、變化を來たし、單に食邑としての意義を有するのみとなつた。こゝに於て本來の投下領はこれを本投下と稱するに對して、新投下領は單に投下又は分撥民戸と稱した。しかもこの投下なる語は抽象的な投下權を意味する事が多く、階級的には位下と投下の兩者が包含せられ、更に内容的には本投下と食邑とを含む極めて多義的な語となつたが爲めに仁宗頃から以後は特に封建集團化したる本投下を愛馬(Aimac)と稱するに至つたと説明されてゐる。かくて投下の問題を繞る論争も一應解決を見たかの感があるが、更にこれを鐵案たらしむべき同氏のより詳細なる論證を期待して已まない。

次に「拔都終焉の年次に就いて」(岩村忍氏)は支那史料が拔都の歿年に關して何等記すところなく、洪鈞の元史譯文證補にはじめて「憲宗六年拔都薨年四十八西一千五百五十六年薨於浮而噶河濱」なる記事が見出されるのであるが、氏はこの記事を疑問として、その誤謬を訂正すべく努力されたものである。氏は先づ右の記載の基くところを明かにし、次でその典據となる史料が如何にして、成立せるか

を溯つて吟味したる上、更にその當否と在來の史料とを再検討することによつて、次の如き結論に到達せられたのである。即ち氏に従へば右の記事がドーソンに基けるものなるは元史譯文證補の卷頭に掲げてゐる西域書目中の諸書を比較對照する事によつて明白であり、且つドーソンの一ニ五六六年說そのものが既に露文元史に據る推定の誤と認むべきであつて、拔都の死は當然一二五五年十月より十二月に至る間に求むべきであると考定された。拔都の子撒里答が何處の地で父の訃報に接したか明かでないために、多少議論の餘地も存するやに思はれるが、一二五五年說に蓋然性があると見てよろしからう。なほ洪鈞の元史譯文證補は、アラビヤ・ペルシャ等の根本史料を參稽することなく、主としてドーソン其他の歐洲近代史家の著作を翻譯せしめてそれに據つた旨記されてゐるのに關聯して、最近竹内好氏が「中國文學」に譯出連載中の「賽金花口述」の中に

洪先生は洋文はおわかりになりませんで、西洋の言葉は一口もお話になれなかつたのです。外國の本を参考されるときはベルギー人が居りまして翻譯して差上げました。よく先生の御用で方々の圖書館へ材料を探しに行かれたやうです。根亞(ケンア)といふ名前で、金といふ中國の姓をつけてゐましたから、私たちは金先生とよんでゐました。

と記されてゐるのを興味深く感じた事をこゝに附記して置く。

以上の他に服部四郎氏の「ブリヤート方言の分類」、播磨檜吉氏譯・クレメンツ「外蒙古西遊記の考證」の二論文があり、更に梗概かにし、次でその典據となる史料が如何にして、成立せるか

ヴァンの「古代中亞帝國」をそれべ紹介批評して居られる。なほ今回は研究所研究部の諸氏の論文は殆ど見當らないけれども、號を重ねるに隨つてそれらの方々の業績に接する事が出来るであらうと私に期待してゐる。

最後に妄言を謝すると共に本誌の發展を祈つてやまない。

(竹田龍兒)

## 支那四千年史

(後藤末雄著  
第一書房發行)

國民の支那への關心が昂まるに連れて支那四千年の歴史を平明に興味深く説いた概説書を要望する聲は各方面から聞えてゐたが、今日迄にこの種の書物が當然専門史家によつて書かる可くして實は殆ど書かれずにある。鳥山喜一教授の「黃河の水」などはこの意味に於て珍重すべき存在となつてゐる。一般讀者層を相手に啓蒙的な筆を執る事は一見易きに似て實は存外に苦心を要するものである。時代の熱烈なる要望にも關らず史家が自重して容易に筆を執らうとしないのを見て敢然これに應ぜられたのが後藤博士の「支那四千年史」である。發刊後旬日を出でずして早くも版を重ねつゝある事實をみて本書が如何に世に迎へられてゐるかを知るに足るのであつて行文の輕妙さと敍述の平明暢達とは流石と敬服させられるものがある。著者は「柄になく小説風の筆を弄した」と自遜して居られるが、面白く讀ませるといふ點では充分に所期の効果は收められてゐると思ふ。筆者は通讀して寧ろ面白過ぎはせぬかを感じた位である。本書をものせらるゝに際

## 寄贈交換圖書雑誌目録

蒙古學報

一

蒙古研究所研究部

民族文化 三、四、五  
書譜 十九、二〇、二一、二三

山岡書店

Pitaka 八ノ六、八、九、一〇、二、九ノ一

北京近代科學圖書館

佛教研究 四ノ二、四、五、六

大藏出版社

東洋思想研究 十一、十二、十三、十四

大東出版社

龍谷史壇 二六

東洋思想研究所

龍谷大學史學會

美術研究所

しての著者の心構へは序言の中に明かに示されてゐる。上下四千年の歴史を限られた紙數の中に纏め上げようとするには重點主義に據らざるを得ないのは言ふまでもないが、重點の置き處如何が相當重要な問題であると思ふ。本書に於て著者は専ら重點を文化の面に置かれた結果、社會史的考察が閑却され勝ちなのが目に附か。著者は可及的廣範囲の讀者層を狙つてレベルを下げられたのであらうが、一應は支那史の基礎をなす支那大陸の地理的環境や、考古學上より見えたる支那文化の始源等に關しても簡単な説明を與へて置いて頂きたかつたと思ふ。然しそしては望蜀の感に過ぎないのであつて、本書によつて一般世人の支那史に對する興味が大いに喚起せらるゝであらうこと信じて疑はない。妄評を敢てした事を謝すると共に、本書を江湖にお薦めする次第である。

(竹田龍兒)